使徒言行録 13 章 1-12 節
「送り出されて」

本日の13章から先は、使徒言行録はサウロの活動を語っていきます。サウロは、9節で「パウロとも呼ばれていたサウロ」とあり、この後13節以降ではパウロとのみ呼ばれていきます。「サウロ」はユダヤ的な名前であり、「パウロ」はギリシャ・ローマ的な呼び方です。使徒言行録13章以下は「パウロ言行録」と言ってもよいくらいの記述になっていくのです。

バルナバとサウロはエルサレムからアンティオキアの教会へ戻ってきました。アンティオキアの教会は、ヘブライ語を話すユダヤ人を中心としたエルサレムの教会に比べると、多様な人々が集まっていました。本日の聖書箇所の最初のところに、当時の教会のリーダーたちの名前があげられています。人種や育った環境の異なる人々がリーダーであり、おそらく、教会に集う人々も多様な人々であったと考えられます。健全な教会形成のためには、本来、多様な人々が集まったほうが良いのです。教会は本来は神によって召された多様な人々が、神さまを見上げることによって結ばれるものです。そこに本来の生きた信仰が満ち、力を持つのです。このアンティオキア教会に新たな宣教ヴィジョンが神さまによって与えられました。「主を礼拝し、断食していると、聖霊が告げた」とあります。共に礼拝し、断食してというのは心を一つにして祈りに集中していたということです。そこに聖霊によってあらたなヴィジョンが示されたのです。「バルナバとサウロを私のために選び出しなさい。…仕事に当たらせるために。（2 節）」とのヴィジョンでした。アンティオキア教会の人々は心を一つにして祈り、バルナバとサウロを「送り出す」ことによって新しい一歩を踏み出したのです。「送り出す」とは「派遣する」という意味や「解き放つ」という意味も含まれています。アンティオキアの教会の中心的指導者であるバルナバと、若いけれど有能なサウロという強力なリーダーたちを、敢えて教会から解き放ったのです。これはアンティオキアの教会にとって大きな損失です。しかし神の示しに従って、何かを解き放つ時、神さまは豊かな祝福を与えてくださいます。バルナバとサウロは、アンティオキアを遠く離れて宣教旅行に向かいしました。これがいわゆるパウロの宣教旅行の 1 回目となります。

さて祈りによって送り出されたバルナバとサウロは、アンティオキアから 200 キロ以上離れたキプロス島へ向かいました。彼らはキプロスの文化行政の中心地で宣教を行ない、うまくことが運んでいるようでしたが、妨害が入ります。偽預言者、そして魔術師でもある、バルイエス、またの名をエリマという男がバルナバとサウロに対抗してきたのです。しかし、忍耐強く祈りつつ歩む時、必ず神が導いてくださいます。この魔術師は、権力者に取り入って宮廷神学者とか家付き魔術師のような地位を得ていたと考えられます。しかしこのような福音ならざる者は、正統的な福音の前で無力なのです。この男も聖霊に満たされたパウロによって、その無力さを暴かれました。目が見えなくなるというのは無力さの象徴です。このエルマの存在によって、総督はバルナバとサウロを信じるようになったのです。それは単に奇跡的なことを見たからではなく、そこに主の働きを総督は見たからです。総督は、「主の教え」に驚いたのです。まことに信じるに足る、まことの神の業を総督は見たのです。そしてそれこそが神がなさったことでした。バルナバやサウロにとっては障害であり、神に背く悪徳の男をも、神さまは用いられました。総督、ひいてはキプロスの多くの人々が神を信じ、救われるために用いられたのです。神さまはすべてのことを、救いへと、愛とへと用いられます。私たちをも用いてくださいます。そしてまたこの私たちのためにも神はすべてのことを用いてくださいます。